

山と博物館

第23巻 第3号

1978年3月25日

大町山岳博物館



早春のワサビ田

撮影 平瀬貴志

博物館と私

いわゆる「山博」とのおつき合いはこの博物館のプランナー羽田健三先生のお手伝いから始まるからもう四半世紀にもなるだろうか、その割にあまりお役に立っていないことに思い当たる時、深い自虐の念に苛まれる。郷土大町の特質は後立山連峰を主軸とする素晴らしい自然環境にありこの優れた我々の財産をテーマにした博物館を創り出そうという計画が練られる段階では、まだ高校生だった私はそれを充分、理解できぬま、羽田先生の指導のもと、来るべき日に備えて展示資料の収集に夢中だった。その間、公民館青年部を中心とする先輩達が郷土愛に燃えて当時の町及び町議会に対し山岳博物館の必要性を熟く説き、設立運動を強力に押し進めた。その結果昭和二十六年秋遂に初代の山博が現在の神楽町公民館附近にあった旧織物工場を改造して開館する運びになった時の感激は今もつい昨日のこの様な新鮮さで想い起される。オープンにしたもの、何とか博物館としての形を整えなくてはと資料収集を中心に野外調査や動物飼育、啓蒙活動等多くの問題が山積しており漸く学校を了えて離れた家業もそこ／＼に家族の白い眼を気にしながらも山博やフィールドで仲間と過す幾時間かが私にとって充足した日々であったと今にして思える。数年後の昭和三十三年夏、大系線全通記念事業として割合すんなりと現在地への移転が実現し山博としての機能を着実に果たしたことを確認して仲間と祝杯を上げたものである。あれから二十年余、山博は脱皮を重ね成長し、創設期には夢であったライチョウやカモシカの飼育、増殖も見事に成功させ各方面から高い評価を受ける迄に至ったことは最早説明を要しない。只この文化事業は常に住民の理解特に若い人達の支援が不可欠と言える。選播きながらも、もう少し青少年の間に山博の理解を広めてゆく方策を立て一人でも多くの支持者を育てることこそ博物館活動を活況にしたいの世代へ継ぐ唯一の途と信ずる。

飼育下のライチョウ (52年度)

宮野典夫

はじめに

ライチョウ保護増殖事業は、本年度で再開後3年目となった。昨年度フ化した雛は、8羽が成鳥として冬を越し、本年度は12羽を飼育するところからスタートした。ところが新しい病気の発生などにより、死亡が相次いだ。現在、それらの症状もみうけられず、小康状態を脱したと思われる。ここに52年度のライチョウ低地飼育の経過を報告する。なお、ライチョウ保護増殖事業を進められるのは、大町市民をはじめ多くの方々の御理解と、関係諸機関の御協力による賜であり、深く感謝するとともに、これからも御指導、御支援の程をお願い申し上げます。

繁殖の準備

きびしい冬が終り、雪がとけはじめるころ、ライチョウの雄はなわばりを形成するため、群飼いはできなくなる。成鳥12羽(雄4羽、雌8羽)のうち、4つがいを冷房施設のあるライチョウ舎で各々飼育し、残りの4羽を冷房のない組み立てによる禽舎で飼育した。

病気の発生を防ぐためにライチョウ舎の周囲にサラシ粉を散布し、飼育舎内は砂の入替えや、スチームクリナーによる蒸気消毒をし、フ卵室、育雛室のホルマリン燻蒸などの作業も4月の下旬にはすべて終了した。また、フ卵器、育雛器の予備運転も行ない、親鳥が抱卵や育雛を放棄しても、いつでも人工に切り替えられるように作業を進めた。

産卵場所は冷房施設のある室内の砂場を予定し、アカマツの枝でライチョウが身を隠せるような環境を作り、果材としてアカマツの

葉を消毒、乾燥したものを用意し、産卵を待った。

産卵

4つがいのうち、産卵をしたのは2つがいの雛である。産卵期になって病気の発生がみられ、産卵をせずに死亡したり、産卵後死亡するという状態になった。

産卵はだいたい1日おきか、3日に2卵の割合で産卵したが、抱卵を放棄し、人工フ卵



ライチョウの巣

に切替えた後、再び産卵したことなどから産卵周期が乱れたことがある。ひとつがいは5月15日より6月24日までに20卵、もうひとつがいは5月27日より7月2日までに15卵の計35卵で、昨年度と同様に自然界での産卵数の2〜3倍であったが、卵の重量、大きさ、卵殻の色、模様はすべて正常なもので、軟卵などもなかった。なお、無精卵が12卵、破損卵が1卵、有精卵が22卵であった。

産卵場所は営巣環境を作った砂場、初卵を産む2日前に砂を掘り、スリパチ型にしてあった。産卵後は巣にすわりこんだままクチバシのとどく範囲のマツの葉をかき集めるので、産卵期には巣のまわりに常に果材を用意しておくなくてはならない。そして、次に産卵する時、巣にある卵をマツの葉の下から出してすわりこみ、産卵した後再びマツをかぶせる。はじめは粗末な巣も産卵することにマツ葉を重ねるので、マツの葉がしきつめられた巣となった。

産卵期には雄も雌も巣より離れた場所でもネグラをとり、糞の散在からみても、産卵以外にはほとんど巣には近づかないようである。

フ化

今年度は2つがいで35卵を産卵し、これを5のグループにわけてフ化させた。各グループごとにフ化の経過をたどってみる。

・Aグループ

第1卵より第7卵までの7卵を5月31日に巣よりとりあげて、人工フ卵を開始した。この7卵からは6月24日に5羽の雛が誕生し、残りの2卵はフ化直前に卵の中で

死亡していた。

・Bグループ

第8卵より第14卵までの7卵は6月7日に親鳥が抱卵を開始したが、4日後に放棄したため人工フ卵に切替えた。このうちから3羽の雛が生まれ、残り4卵は無精卵であった。

・Cグループ

第15卵から再び産卵を始めて、6月24日に第20卵を産卵した後、6卵を腹下におき、抱卵を開始したが、11日後に抱卵を放棄してしまつたため、人工フ卵に切替えて7月18日に5羽の雛が誕生した。残りの1卵は親鳥によると思われる破損卵であった。

A〜Cグループの親は、昨年度29卵を産卵したが、自然抱卵はまったくしなかつたライ

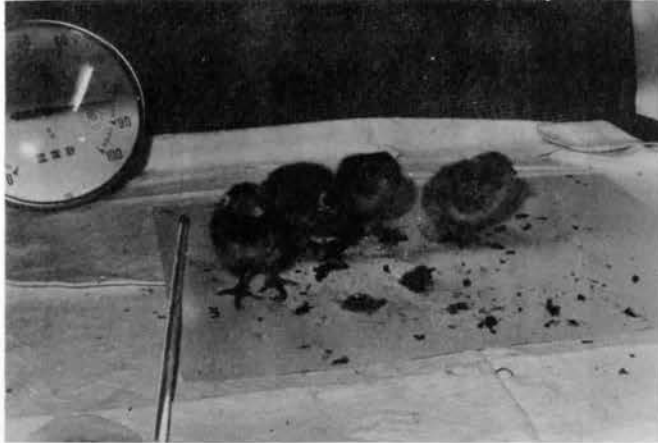
チョウである。

・Dグループ

A〜Cグループとは別の親より産卵された



抱卵中の雌



餌付け中の雛



フ化後60日の雛

餌付けはすべて雌が行ない、1日に2〜3回巣より離れて採食、脱糞、羽づくろいなどを行なう。抱卵中の雌の糞は非常に大きく、抱卵の開始したことの目安にもなった。今年度は3回も抱卵を中止したが、この原因については病気の影響、営巣環境の条件不足、ストレスによる障害などが考えられ、今後の課題として残された。

人工フ卵は立体フ卵器を用いて、1日8回の自動転卵、1日1回の手による転卵や配置転換を行ない、フ化の2日前からは転卵をしなかった。検卵は5日〜7日ごとに行ない、無精卵や発生中止と思われるものは、生存している卵への影響を考慮して、検卵時にとりのぞいた。フ卵器内の温度、湿度は図に示すようである。なお、フ化前には温度をわずかに高くし、湿度は低くならないように注意した。特に打殻傷が入るようには霧フキで直接卵に噴霧し、高温になるようには霧フキで直接卵にフはフ卵開始後23日目にフ化するが、各グループ、各個体により差がみられ、真夜中にフ化した雛もあった。人工フ卵によるフ化率はEグループで発生中止した3卵を親鳥の抱卵中に起ったものとして除けば84%となる。

育雛

親鳥による抱卵がなかったため、すべての雛は人工育雛した。今年度はライチョウ用の育雛器を作成し、これによる育雛も試みた。この育雛器はプリンスバタリー型で、温室内のヒーターを天井面にはりめぐらし、その下に網を張り、冷室はすべて金網張りにして、ニワトリに比べ、動きの激しいライチョウのため、天井を高くしたものである。

餌付けはニワトリの卵をゆでた卵黄の裏ごし、青菜(主としてうぐいす菜)の細切、リンゴおろしを中心としたものを、朝7時から夜7時まで2時間おきに給餌し、ほかに自家配合飼料、チックフード、市販の小鳥用餌、脱脂粉乳を混ぜて与えた。卵黄、青菜、リンゴをよく食べるようになる、配合飼料やチックフードの量を少しづつ増し、廃温するころには、配合飼料のねり餌、青菜、リンゴを1日2回の給餌にした。今年度は一部の雛に市販のニワトリ用のチックフードを配合飼料と並行して与えてみたが、嗜好度は高くなかった。自家配合飼料はアワ、ヒエ、玄米、フスマ、コヌカなど20数種類の材料を用いて蛋白質、脂肪、繊維、カルシウム、リン、ビタミン類などの栄養的バランスを考慮して作成したものである。特に繊維の供給にはナラの乾葉をミールにしたものを用いた。

育雛器の温室温度は36℃から徐々に低下させ、40日目には温源を切り、育雛器での飼育を終了させた。今年度は16羽の雛が誕生したが、廃温まで生存したのは6羽である。死亡した10羽は2〜7日令に死亡し、個体が小さいため原因については不明であるが、雛自身の問題としてフ卵時の問題累積がフ化後に発覚したと考えられることや、初生雛に対する餌、環境、衛生面などの育雛技術とあ

第1卵から第7卵までを6月15日に巣よりとりあげてフ卵器に入れたが、7卵のうち6卵までが無精卵であり、残り1卵もフ卵後半で発生中止したため、このグループからのフ化はなかった。

・Eグループ

第8卵から15卵までの8卵を7月2日より抱卵し始めたが、13日目に放棄してしまったので人工フ卵に切替えた。このうち2卵は無精卵であり、3卵は親鳥による抱卵中に発生中止となったと思われるものであった。このグループからは3羽がフ化し、この雛は低地飼育での3世となる。

D、Eグループの親は昨年度フ化したライチョウのつがいである。

抱卵はすべて雌が行ない、1日に2〜3回巣より離れて採食、脱糞、羽づくろいなどを行なう。抱卵中の雌の糞は非常に大きく、抱卵の開始したことの目安にもなった。今年度は3回も抱卵を中止したが、この原因については病気の影響、営巣環境の条件不足、ストレスによる障害などが考えられ、今後の課題として残された。

人工フ卵は立体フ卵器を用いて、1日8回の自動転卵、1日1回の手による転卵や配置転換を行ない、フ化の2日前からは転卵をしなかった。検卵は5日〜7日ごとに行ない、無精卵や発生中止と思われるものは、生存している卵への影響を考慮して、検卵時にとりのぞいた。フ卵器内の温度、湿度は図に示すようである。なお、フ化前には温度をわずかに高くし、湿度は低くならないように注意した。特に打殻傷が入るようには霧フキで直接卵に噴霧し、高温になるようには霧フキで直接卵にフはフ卵開始後23日目にフ化するが、各グループ、各個体により差がみられ、真夜中にフ化した雛もあった。人工フ卵によるフ化率はEグループで発生中止した3卵を親鳥の抱卵中に起ったものとして除けば84%となる。

卵を開始したことの目安にもなった。今年度は3回も抱卵を中止したが、この原因については病気の影響、営巣環境の条件不足、ストレスによる障害などが考えられ、今後の課題として残された。

人工フ卵は立体フ卵器を用いて、1日8回の自動転卵、1日1回の手による転卵や配置転換を行ない、フ化の2日前からは転卵をしなかった。検卵は5日〜7日ごとに行ない、無精卵や発生中止と思われるものは、生存している卵への影響を考慮して、検卵時にとりのぞいた。フ卵器内の温度、湿度は図に示すようである。なお、フ化前には温度をわずかに高くし、湿度は低くならないように注意した。特に打殻傷が入るようには霧フキで直接卵に噴霧し、高温になるようには霧フキで直接卵にフはフ卵開始後23日目にフ化するが、各グループ、各個体により差がみられ、真夜中にフ化した雛もあった。人工フ卵によるフ化率はEグループで発生中止した3卵を親鳥の抱卵中に起ったものとして除けば84%となる。

化した雛もあった。人工フ卵によるフ化率はEグループで発生中止した3卵を親鳥の抱卵中に起ったものとして除けば84%となる。

育雛

親鳥による抱卵がなかったため、すべての雛は人工育雛した。今年度はライチョウ用の育雛器を作成し、これによる育雛も試みた。この育雛器はプリンスバタリー型で、温室内のヒーターを天井面にはりめぐらし、その下に網を張り、冷室はすべて金網張りにして、ニワトリに比べ、動きの激しいライチョウのため、天井を高くしたものである。

餌付けはニワトリの卵をゆでた卵黄の裏ごし、青菜(主としてうぐいす菜)の細切、リンゴおろしを中心としたものを、朝7時から夜7時まで2時間おきに給餌し、ほかに自家配合飼料、チックフード、市販の小鳥用餌、脱脂粉乳を混ぜて与えた。卵黄、青菜、リンゴをよく食べるようになる、配合飼料やチックフードの量を少しづつ増し、廃温するころには、配合飼料のねり餌、青菜、リンゴを1日2回の給餌にした。今年度は一部の雛に市販のニワトリ用のチックフードを配合飼料と並行して与えてみたが、嗜好度は高くなかった。自家配合飼料はアワ、ヒエ、玄米、フスマ、コヌカなど20数種類の材料を用いて蛋白質、脂肪、繊維、カルシウム、リン、ビタミン類などの栄養的バランスを考慮して作成したものである。特に繊維の供給にはナラの乾葉をミールにしたものを用いた。

育雛器の温室温度は36℃から徐々に

飼育下のライチョウ

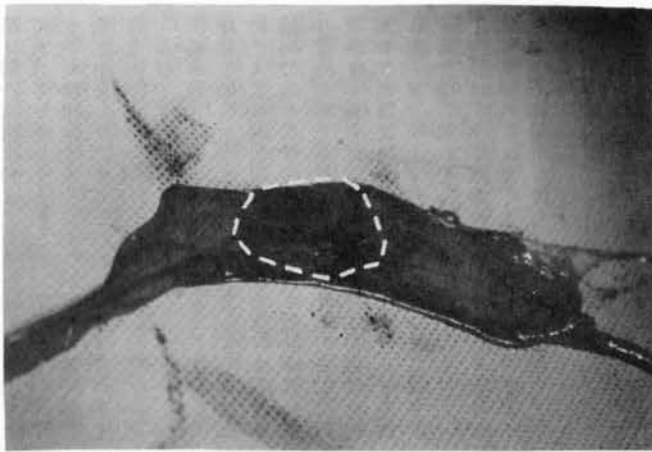


あわせて、総合的な検討が必要である。また、低地飼育の3世も6日令で死亡した。

成鳥の飼育

成鳥の飼育は1日に2回、配合飼料と青菜リングを給餌し、掃除と消毒液の散布を毎日行ない、温度は朝夕は低くし、夏季の昼中も22℃以上にならないようにした。また、雛も90日令をすぎると体重も成鳥と同じくらいになり、成鳥と同じ飼育方法で行なった。

ライチョウ飼育を再開してからは、コクシジウムのオーシスト、サルモネラ菌などの検出がみられたが、6月になって成鳥が死亡し、その解剖結果から、トリアデノウイルスによる包人体肝炎が起っていることが判明し、その後、6月〜8月にかけて成鳥7羽が死亡した。この中には昨年度飼育下で自然抱卵、自



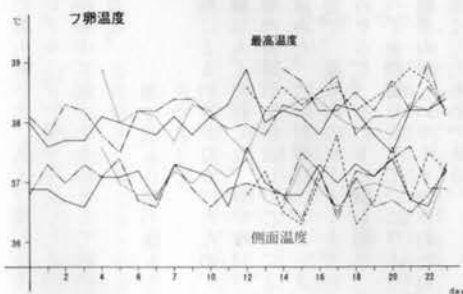
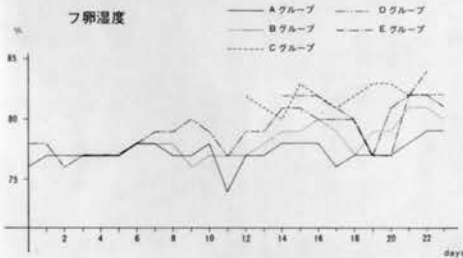
小腸にみられた異常(破線内)

然育雛に成功したつがい2羽も含まれており、今年度も自然繁殖を期待していただけに残念であった。この病気の判明と同時にテトラサイクリン系の抗生物質の投与、ビタミン強化、各飼育舎の消毒を行なったことにより波及を防ぐことができた。

11月〜1月にかけて寄生虫による症状で4羽が死亡した。虫卵検査の結果、毛体虫の卵が検査され、その後実施した生存しているライチョウの糞便による検査でも毛体虫の卵、盲腸虫または回虫の卵が検出されたため、駆虫性抗生物質、ビタミン剤を餌に添加するとともに、衛生管理面では飼育舎の出入口での長ぐつのはきかえを徹底し、寄生虫の伝播や他の病気の侵入を防いだ。また定期的な虫卵検査を行ない、寄生虫の発生状況を把握した。その後の検査では虫卵の検出はみられていない。

3月になり1羽が急に死亡した。このライチョウは50年度に爺ヶ岳より採卵し、人工孵化させたライチョウ群の最後の1羽であった。現在その死因を究明中である。

トリアデノウイルスによる包人体肝炎



フ卵器内の温度、湿度

および毛体虫や回虫による寄生虫病は、今年度になって発生した新しい病気である。このため、原因の究明や治療法、予防法の解明、また治療効果が出るまでにある程度の時間を失った。しかし、予防、治療法にある程度の成果がみられ、今後、類似の病気に対して明るい見通しがつけられたことは幸であった。ライチョウ飼育増殖事業は、松本家畜保健衛生所のご理解と積極的な協力により進んでいる。実施組織は大町山岳博物館と松本家畜保健衛生所の両者で編成した研究チームによって事業を展開し、飼育、管理の技術面は大町山岳博物館があたり、予防衛生や治療の技術面は松本家畜保健衛生所が担当している。

博物館だより

育雛であったが、今年度新たに幼鳥飼育舎の建設が進み、家庭用クーラーで冷房可能な部屋での育雛ができる。現在、4羽(雄2羽、雌2羽)のライチョウを3棟のライチョウ舎で飼育している。健康状態は良好で、寄生虫の卵も検出されていない。また餌の喰い込みも良い。羽も白色から褐色への換羽時期となり、雄は肉冠を開き独特な声で鳴くようになってきた。ライチョウもなわばり形成などの繁殖準備に入り、私達も53年度の繁殖の準備を始めることを記して今年度のライチョウ低地飼育の報告とする。(大町山岳博物館)

資料寄贈ありがとうございました。
マガモ 一体 北安曇郡池田町一丁目二五
二〇一〜二二 松田孝三殿

ライチョウ寄付金

三〇〇〇円 東京都練馬区南大泉五四〇
藤田いさを殿

カモシカ保護収容
3月17日(死体)同20日(生体)と高瀬入
でカモシカの死体、生体が発見され収容さ
れた。

訂正
前号1P表紙下 テグス系:テグス系に訂正

山と博物館 第23巻 第3号
発行所 長野県大町市TEL②(二一)
印刷所 大町市 大町山岳博物館
大町市 大町山岳博物館
定価 年額八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野一三)二九二二